

「南船北馬」現地調査覚書（続編）

著者	田中 菊次郎
雑誌名	井上円了研究
巻	2
ページ	101-113
発行年	1984-03-14
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006758/

「南船北馬」

現地調査覚書（続編）

田中菊次郎

「田了と民衆」という小論を発表してから三年がたった。私はその中で「南船北馬」現地調査覚書を綴り、新潟県、山形県、熊本県、福岡県における調査メモを記したが、本稿はその続編、山口、島根県におけるメモである。

5. 山口県における調査メモ

昭和五十五年の福岡県における井上田了博士の足跡調査は、西日本新聞に二回にわたって大きく報道されたが、読者からの反響は広く、福岡県下のみならず、山口大分、佐賀、長崎に及んだことは、すでに記したとおりである。その中で山口県阿武町奈古、西村信海氏からの

情報が、とくに田了巡講の後世への影響を跡づけるものとして貴重であった。

これを確認するため、私は昭和五十六年七月、山口県下の調査を行ない、その成果を毎日新聞中国版（昭和56・9・2附）に寄稿した。中国版は山口県下全域、島根県石見地方に約十六万部が配布されたと、毎日新聞山口支局から報告があった。山口県下十件、島根県下七件の反響があったので、それをもとにさらに五十七年三月第二回の現地調査を実施した。

田了博士は大正二年（一九一三）山口県下を講演行脚すること八十八日間、九十四町村、百十四カ所で二百十七回の講演会を開き、約七万九千人の民衆に語りかけた。島根県は明治四十二年（一九〇九）これも八十六日間に七十八町村を回わり、九十五カ所で百八十一回の講演は五万一千四百人の聴衆を集めた。いずれも今から七、八十年を逆のぼる。こうした「南船北馬集」の記録をたよりに、私は連絡のあった人々に、当時の模様をコピーして手紙を交換しているうちに、岩国市に田了講演の世話を

した百歳の老人が健在であるとの知らせが入った。円了と直接接触した関係者としては、いままでに判明した中では最高齢者であつたので、五十七年三月山口県の第二回調査を急いだ。これまで別の取材であつたが、一日を失つて間に合わなかったことが、しばしば私の体験にあつたからである。山口県調査は第一、二回を通じて情報提供者二十名を越し、円了の手紙や筆墨は二十数点に達した。以下に主なるものを列記する。

(1) 奈古町にて

山口県奈古(なこ)町は山陰線萩から四つ目の駅である。二つの島を入口に抱いた美しい湾に面していた。奈古では円了ゆかりの法積寺住職西村信海氏と大野公太郎氏とに会つた。信海氏は「井上博士来寺後の教化活動」という報告をまとめ、大野氏は小学高学年のとき円了の講話を聞いた時の思い出を鮮かに話された。

奈古については益田市在住の町原志加子さんの来信が別にあつた。

西村信海氏(六十二歳)阿武町奈古―法積寺住職。さき

に福岡県における調査メモに記したとおり、信海氏はその先代隆海氏が円了博士の修身教会運動に賛同し、いろいろの活動を行なつた記録を調べ「井上博士来寺後の教化活動」と題した年表を用意し、説明された。

大正二年九月二十一日、日曜にもかかわらず円了は小川村から「峻嶺急坂を下つて奈古村に至」つた。「行程八里の間に六時間を費せるを見て、其難路たるを知るべし、会場兼宿所法積寺は浄土宗なり」と南船北馬集第八編は述べている。本堂には畳一枚大の扁額「神通自在」の雄渾りんりの四文字が掲げられていた。円了の書である。

年表によると、円了来寺から四、五年たった大正七年初ろ奈古仏教団を結成して隆海氏の活動が実つた。仏教団会員名簿には村長、学校長、各派寺院総代、商家、農家、医師そして学生四名など、五十八名の村のリーダーの名がある。この会は戦後には夏季仏教講座を開き、京大や山口大から講師を招いている。

日曜少年会は大正十年開設され、各寺連合少年会が年

一回開かれる盛況であった。法積寺少年会は昭和二十年六月、戦争で一時中断したが、二十一年四月に復員した信海氏によって復活し、会員約百五十名が勤行に参加、法話を聞き、紙芝居、幻灯、人形芝居を楽しんだ。五十年代は進学学習塾の流行で参加者が少なくなって中止した。

法積寺仏教処女会、青年会も昭和八年結成され会員八十名を数え、仏教研究、俳句会、旅行、演劇、生花等に活動した。これも昭和十九年戦争の激化で中断し、戦後二十三年に再開したが、青年が少くなって数年後に中止された。しかし現在も法積寺婦人会は会員二百五十名、私順会が以前の青年会幹部を中心に会員五十名を集め、活動している。

これらは井上円了らが点火した修身教会運動が、その賛同者、西村信隆、信海父子に継承され、日本海に臨む風光明媚な奈古で大正二年（一九一三）以来社会教化活動として現在になお脈々とつながっているとみていいだろう。青年会の盛んなころは、無縁仏を整理して共同墓地

をつくったり、近くの山を拓いて公園とし、農漁村にふさわしい「魚蚕群靈之塔」を立てるなどの社会奉仕活動を行った。昭和二十七年奈古町制十周年に当たり、町長小野博盛は法積寺少年会、青年会に表彰状を贈っている。

西村信海氏は大正大学卒、町教育委員もつとめた。井上円了の遺墨四点が知人からお寺に集められていたので私は記録した。円了は本堂で揮毫したらしく、墨の目がくっきりと表われている書があった。

町原志加子（七十九歳）益田市「私がまだ僻地の尋常小学校に通っていた頃、父が井上円了先生の御講演をきいて深い感銘を受けました。そして母に語るのを聞き、今尚私の脳裡にも刻まれています。毎日新聞九月二日の「井上円了の足跡を訪ねて」を読んで一筆申上ます。父は当時小川村（前掲）の村長であったかも知れませんが、父は事ある毎に幾度も村長にかつぎ出されましたので定かではありませんが、揮毫を頂いたような気がします。その後仏教講演会で山口大学村田昇先生とは数年前

まで誠に親しく、著書もよく送って頂きました。明治六年生れの父は漢学を修め公共事業に尽しました。これは蛇足で恐れ入りますが、私は幼い頃から父母の会話をよく覚えています。幸徳秋水事件をひそひそと話していたり、伊藤公のハルビン遭難、桜島の大噴火、明治の古きよき時代の宗教家や文学者、思想家、政治家、教育家等々……残り少い珠玉のような人々の死を惜しみます」

以上は九月三日付の町原さんからの来信の要であるが、奈古に近い小川村近在に住んでいたことがあり、円了が小川村から奈古へ来る途中、地方有力者、町原さんの父が円了講演に感銘したこと、本人も奈古仏教講演会に参加していることがわかった。山口大学の村田教授は法積寺の夏季仏教講座の講師に名を留めている。この記録は法積寺の活動が広い地域のものであったことを示している。

大野公太郎氏（八十歳）『奈古町』私は法積寺で大野氏に会うことができた。円了の講演を直接聞いた人である。当時十三歳で小学校の先生に引率され会場に行っ

た。法積寺本堂はいっぱい人があふれていた。講演の内容は幽霊談であった。全国の事例を挙げて話されたが、結局幽霊は世の中にいない。絶対そういうことはない。

幽霊は幻灯で映像をうつすように、幽霊をみたという人の心の中に、何かそのネガに当たるものがあり、それが幕にうつる。そういうネガのない人は幽霊をみることはないと言われた。私はそれ以来幽霊がこわくなくなった。この話について、西村信海氏は一切唯心像といって、すべては心の中がつくるものだという言葉があるといい添えられた。

大野少年はのち下関商業に進学し、下関・観音崎町の幽霊寺を訪ねた記憶がある、幽霊寺というのは住職が幽霊の話を聞いて寺に帰ると、幽霊の姿を画いた絵があったという伝説があり、幽霊の出た日が縁日とされ、参詣者が絶えないという。この絵をみても大野少年はもちろんこわがることはなかったという。大野氏のこの体験談は円了の迷信打破の効果を実証している。

（2） 美称市にて

山口県美称市は山陰本線長門市から山陽本線山陽町に至る美称線の主要都市である。円了が特に親しくした長福寺がそこにある。私は長福寺に集まってこられた今城富男、木村作花、村田豊祐、来島最知氏らに会うことができた。円了が大正五年に訪問したときは「天の人が降ってこられたような気持で迎えた」と木村氏は少年時代の印象を述べており、大へんなお祭りさわぎだった。円了への関心と尊敬がそこに表われている。

長福寺＝美称市豊田前町＝井上円了らの山口県巡講に随行を勤めた来島好間（きしまよしま・哲学館出身）の寺である。随行というのは附添いであり、一切の世話役、案内役である。長福寺前庭に「教勅純聴師之碑」があり、碑文は円了の書いたもの。純聴師是好間の先代である。大正七年、好間の妻女の死去にあたり、円了が送った弔文が残っている。私が昭和五十六年七月訪問したとき、檀徒総代今城昌男、木村作花（さか）、植田豊祐、当主来島最知の諸氏が出迎え、円了来訪の思い出をこどもも語られた。

今城昌男氏＝美称市＝長福寺檀徒総代。わが家には円了先生の遺墨が三点あるが、それによると大正二、五、七年と三回にわたって当地に円了さんは来ておられる。父作之進は大正五年、長福寺での講演をお世話しており、父からは、先生を幽霊博士として聞いていた。母かつのは「仏さんがこられたかのように有難かった」といっていた。昌男氏自身はサンデー毎日連載の記事（昭和三十七、八年ころ）で、円了博士が時の文部大臣とやりあった話を記憶しているという。（註・この話はおそらく哲学館事件のことのようなだが、こういうイメージとして記憶されていることは注目される）

木村作花氏（さか・八十歳）、植田豊祐氏（七十一歳）＝いずれも長福寺檀徒総代で大正五年九月五日、井上円了が長福寺を訪れたとき、木村氏は十四歳、植田氏は数え七歳であった。両氏の話。

当時、博士といえば天の人が降ってこられるような気持で迎えた。村の人はそんな人がおみえになるというので、住職が急拠境内に庭をつくり、棧敷を組んだ。門に

は緑のアーチをつくり、庭に紅提灯、彩旗をかざり、露店あり、棧敷ありでお祭りのようだった。棧敷は裏山から松や杉を切り出し、大八車で運び、丸太を板にひいて作った。

円了さんが自動車でこられた（好間氏が小月まで出迎えた）のに村の人々は驚いた。自動車は出迎え方が用意したと思われるが、村人ははじめてみた。一台千円するといふから、一財産だと評判になった。

長福寺の当主、平島最知氏は古老の話として附け加えた。自動車は車の矢が木製で、モールが車の窓にも屋根にも飾られていた。大歓迎の意である。

木村氏は来島好間から「円了先生は東西の学を勉強されたえらい人」と教えられていた。植田氏は、最近のことだが「高校（県立西市高）の教科書に先生のことのっている」と孫から教えられたという。

（註）サンデー毎日や教科書は未調査である。

（3） 岩国にて

この調査の端緒は昭和五十七年一月のお年玉であつ

た。それは由宇町・雪光芳子と端正な字で認めた手紙である。小学校時代の校長先生が円了さんのお世話をされ、いま教え百歳ですとあった。次から次へとこの話はつながっていく。

雪光芳子ゆきみつさん（六十九歳）由宇町 昭和五十七年一月十日付の手紙が、新春のプレゼントのように筆者の手元に入った。雪光さんは毎日新聞の記事を切抜いており、そのまま忘れていた。円了が巡講した際、父、渡辺亀吉氏が山口県玖珂郡伊陸村いからで揮毫してもらった軸が生家に掛けていたことを私に知らせようと考えたが、そのままになっていたとのことであつた。雪光さんは大正二年生れ、ちょうど円了が山口を訪ねた年だが、幼いころから床の間のその軸になじんでいた。「無尽蔵」の三文字が床の丈いっぱいになるような太字で威厳を感じるようであつた。父に聞くと「博士の賢い方が伊陸にお説教に來られたとき書いて戴いた」といい、小学校へあがらぬころなので、何か判らないながら頭の中で「えらい坊様と思ったものでした。父はこの書をこよなく賞で、いつも

山水画よりもこの軸を掛けておりました。父は伊陸村明泉寺の総代を勤めていました」とあった。

雪光さんの調査協力はここから始まった。雪光さんはすぐ実家へ行って軸のことを尋ねたが、どこへ仕舞ったかわからなかった。がもう一つ扁額で「寿山高萬丈」という円了の書があった。実家の妹さんの話では近くの明泉寺にも「南無阿弥陀仏」の円了の軸がかかっているという。

ここまで調査されたお礼に、筆者は伊陸村と由宇村の紀行（南船北馬集第九編）を送ったところ、再度連絡があり、由宇村（現在由宇町）で講演の世話をされた村長、助役、校長らについて、それぞれ調査した結果、世話人の一人玉田隆義氏が百歳で健在とわかったという。

由宇駅は岩国と柳井のちょうど中間にあった。駅から車で山峡をさか上った静かな農村を私は訪ねた。雪光さんは調査結果を述べ、村長、山本元太郎家は息子さんのお嫁さんがのこっていられるが、よそからこられた方なので円了先生のこととはわかりませんということだった

が、蔵の中に村長宛の円了の手紙があった。雪光さんは額になっている、この手紙を借り出して、資料として提供された。

恭賀新年

先日御地開演ノ際ハ多大ノ御厚情ニ
預リ存万謝候 両三日前東京ヨリ拙
著数品発送候間 御入手候ハハ可然
御配布下サル可候 追テ紀行編輯
ノ上更ニ御礼可申述候也

拝具

大正三年一月三日

井上円了

由宇村長 山本元太郎殿

という文面で、円了は十二月二十九日柳井で来島随行と別れ、三十日に帰京して山口県四カ月の旅を終えたが、新春早々に丁重な礼状を尽力者に出していたことがわかった。著書なども贈呈しているのである。

さて、尽力者の助役、校長はすでに亡くなっており、

雪光さんの追跡調査で、生き残っている玉田隆義氏が浮かびあがった。実は雪光さんが伊陸の小学校一年生のときの校長が玉田氏だったのである。玉田氏の現住所がわかった。玉田氏から返事がきたので、さっそく私へ雪光さんは正月早々連絡されたのであった。

雪光さんの調査では、円了が由宇で講演したとき、当時のことを地域の有力者が「幽霊博士がくる」と書いていることもわかった。これは由西小学校百周年の記念文書にあった。

なお雪光さんは「無尽蔵」の軸について、父はその意味を仏教的に無限の慈悲と解していたという記憶を付け加え、妹さんの家から「寿山高萬丈」の軸もと寄せて示された。

玉田隆義氏（九十九歳）＝明治十六年十二月生れ、岩国市＝錦帯橋に近い大きな病院のご隠居で、数え百歳だが元氣いっぱいのお老人である。「由宇における円了先生の講演は七十一年前のこと、山本村長も、高木助役も、井本校長も亡くなられて、生き残りは私一人になってい

る」と玉田氏は大きな声で話し出した。耳が少し遠い。由宇の宿舎三国屋で玉田氏は円了先生に「何か人生の目標をお教え下さい」と揮毫について注文した。円了先生は書物を開いてから「向上発展是人天職」と筆を走らせた。この軸は昭和二十六年の大水害で流した。講演を記録した日記帳も失なった。「円了先生はよほど親切な方でした。私は先生の指導で『向上』をモットーとして生きてきました。この教えは私の骨に沁みこんでいます。」と玉田老はいう。

玉田氏は師範を出て、岩国、高森、由宇、伊陸、川下とつぎつぎに小学校に勤め、満五十歳で退職し郷里の三輪村長、農業、農協勤めなどをへて、いまは岩国長寿会の世話役をやっている。岩国羅漢長寿会という名の社交クラブだが、最高年齢は百十七歳、つぎは百五歳、そして玉田氏となる。「私はいつも井上先生のことを考え、結婚式でもこのことを話している」ということで、掛軸は流したが、その八文字を軸や色紙に何百枚と書いて人々に贈った。「私が百年生きたのも井上先生のお陰であ

る。こればかり書いて人々に贈っている」と繰り返えし語った。書の署名は「働学併進奮闘窟 楽山百寿書」となっていた。頭を働かせ仕事に精出し、奮闘する百歳翁ということである。楽山の号は長寿会のモットーが三楽（無病、長寿、仕事）であることからきている。雪光さんの話では、玉田氏は東京オリンピックのとき村長であったが、県下の聖火ランナーを最年長者として勤めた。

梅本直一氏Ⅵ光市Ⅵ九月二日附の毎日新聞を読んだと早速六日には手紙で連絡があった。二つの書があり、一つは大正二年、光井村で書いたという「道」の一字、円了書の印が変わっている。「談怪我／甬水円了／即是怪」の三行に分かれた四角印である。もう一つは大正七年の書で「誠節一竿釣萬福」とある。大正七年といえは円了没年の前の年であるが、書の内容は庶民の道德訓として、これといって変化のないものである。円了が変わらなかつたのか、民衆が変わらなかつたのか。さきに山形県で今野満佐寿氏宅にあった円了の道歌が大正五年作であることからみて、農山村の意識は急な変化はなく、円了も

それに合わせていたのであろうか。

服部貢氏（六十一歳）Ⅵ阿武郡旭村明木Ⅵ祖父が役場に勤めていた。円了が明木（あきらぎ）で講演のとき書いてもらったと、書のコピーが送られてきた。「梅宇」という扁額、「翠竹苔花閑意志 白雪流水淡生涯」の軸、為服部氏とあるので祖父は円了講演の裏方を務められたと考えられる。

井上博正氏Ⅵ長門市Ⅵ「過ぐる九月二日附の毎日新聞中国版に井上円了の記事を読み、我家にも先生の書かれた掛軸があることを思い出し、通報せねばならぬと思っていたるうち延びのびとなり遅くなりました」と十月八日付のはがきがきた。

書は「白雲涯一色青竹鳥三呼」とあり、円了道人書の下には「談怪我……」の例の印が押されていた。この書のコピーが私の手元に届いたのは、年を越した一月二十四日であった。「実は二ヶ月前写真も出来上り投函を子供に依頼しておいたので既に到着しておるものと思っております」ところ一昨日書類箱の上に置忘れているのを

発見した様な次第」とお断わりがあった。それにしても有難い協力者である。

6. 島根県における調査メモ

毎日新聞中国版というのは山口県を中心にその周辺をカバーしており、当然島根県もその配布区域内にある。

益田市や浜田市からも私へ連絡の便りがあった。

土田伊平氏―益田市―土田さんからの便りは手もちの短冊の中から円了の書を発見したというものであった。

「堪忍の袋の中に萬徳のひそむと知りて堪忍をせよ」という道歌である。堪忍という二字も、さきの誠節の二字とともに、円了書によく出てくるキーワードである。この短冊は明治四十二年隠岐島で講演中に島に遺されたもの。その後さらに「里無邪」の扁額を友人村上恒氏から借りてコピーしたと送られてきた。村上氏の先代専一郎氏が揮毫してもらったということである。

棟忠延氏（八十二歳）益田市―「父が豊田村長時代に円了先生がお越しになり、お手紙や書を頂いているよう

に記憶しています。」とあり、南船北馬集に、明治四十二年五月三日島根県美濃郡豊田村で開会するとき、村長棕熊治郎氏の尽力を記している。忠延氏によれば熊治郎氏は明治三十三年から四十三年まで村長を勤めたとあり、それに符合している。

明清寺―浜田市―「行道進徳」と書いた円了先生の扁額がある。父から円了先生がこの辺りを回られたことを聞いた。私の里は益田市順念寺で「五更山」の大きな円了書の扁額があるとの便り。南船北馬集第四編、明治四十二年五月五日の項に「途中益田町順念寺に一休す、是れ馬場樹心氏の寺なり」とあり、馬場氏は哲学館大学の出身で三日から同行し、七、八日と円了は順念寺を宿寺とした。馬場氏は十一日に円了を見送って別れた。「別れに臨みて馬場氏に『矛盾せる事のみ多き世なりとて若き男をババサンと呼ぶ』の狂歌一首を贈りて後日の笑草となす」と戯れている。これは駄じゃれに過ぎないが、この句で円了が世の中の矛盾多きことを告白していることは、日頃の思いがふつと出たものとして興味がある。

寺井正運氏〓島根県美濃郡美都町〓三編の掛軸のコピ
ーを送り、協力された。

雨余溪上水声肥 樹色春深翠滴衣

一抹炊煙天欲暮 時看童子字微帰

これは津和野を詠んだもの

高津川上路横斜 尋到人丸社畔家

終夕思歌々未就 不呈一句忽回車

高津村は柿本人磨逝焉の地である。

仙道溪頭破曉霞 懸崖曲折路如蛇

葉間点々紅交紫 不見行人只見花

「南船北馬」には美濃町で「緑葉の間に往々燭花と桐
花と藤花とを散見す」とあり、為寺井兄と書されてい
る。父上であろう。これらの詩は南船北馬集第四編に載
せられていた。明治四十二年五月のことである。円了の
漢詩が円熟してきたことを示すものであろう。

新井勇氏〓浜田市〓新井さんは高名な哲学者の書だと
いつてもらった「静中動」の書を送ってこられた。明治
四十二年の書だから、ちょうど円了の島根巡講中であ

る。横四六・五cm縦一三七・五cmの大きな軸で墨痕鮮か
に三字がおさまっている。新井さんの父はそのころ那賀
郡役所書記（当時二十八歳）で、後には村長四期を勤め
た。「もしも雨水会館にて大切に保存して下さるなら寄
贈してもよい」とのご意向を受けて、ありがたく大学に
移管した。百周年記念研究に共感されたのである。

ま と め

この研究は円了の修身教会運動の跡をどこまでも現地
で追い、確めるという計画であったが、円了の講演を聞
いた人々、円了講演の世話をした人々などの中から、私
に連絡をとり話したいという人々、あるいはこういう縁
りの人がいますよという連絡を頼りに、私は各地を歩き
回った。そして今回ついに最高齢百歳の人と語ること
ができた。明治三十九年（一九〇七）に始まった修身教会
運動は、大正八年（一九一九）に円了の客死により終った
が、この運動に触れ合った人達の中から、生き残りを探
し出すのも、いまはもう限界に近い。生き残りの人々と

語るということは、研究開始が時既に遅かったのであった。

しかしなお道は残されていた。私は各地を訪れるごとに、その地方の新聞社を訪ね、当時の紙面から円了関係のニュースを採集し、これを南船北馬集とない合わせて、地方新聞に円了の巡講の意義を特集してもらった。

山形新聞、新潟新聞、熊本日日、西日本新聞、毎日新聞などである。その反響は、即効のあるものから一カ月、二カ月あるいは一年後まで継続されており、新聞の浸透力にいまさら感銘を深くした。読者からの協力は手持ちの情報（談話・書・円了書簡など）のほか近所の知人のもつ情報の紹介に及び、次々に増幅されていった。そのすべてを最後までフォローする時間がなかったのは遺憾である。

円了研究がその途中昭和五十七年度に一年間中断されたことによって、脈々と続いていた協力者との友情関係が一時冷却したのは自然である。

各方面からの情報が途絶えたのである。しかしまだ枯

れ果てたのではない。昭和五十八年一月には山形県村山郡中山町の藻南文化研究所（代表・烏鬼沼喜代子）から「図録岩谷十八夜観音」が送られてきた。藻南とは最上川を藻江と呼んだのである。この書は巫女オナカマ研究十三年の成果である。喜代子さんは私が村山市を訪れたとき、案内して下さった岩谷観音研究者烏鬼沼宏之さんの妻女で、昭和五十五年の出会いである。岩谷観音の堂宇に円了書「神通自在」の扁額がかかっているという縁からである。「一期一会」というのだろうか。

これからも地方新聞の円了の巡講報道を発掘して紹介し続ければ、この方式の研究はさらに多少の進展をみせるかも知れない。二回にわたって記述してきた、これら各地の心優しき円了研究の協力者は哲学者・お化け博士井上円了が東洋大学の創立者であることを知り、百周年を迎える大学へ率直な関心を深めた。

円了巡遊の影響として、講演内容とその直接の反応を確めた成果としては、民衆の生活の知恵としての道歌とか、それぞれの職業に合わせた生き方の教えが喜ばれた

こと、お化けは存在しないことを少年たちが認識したところなどが出てくる。修身教会運動は所によつては深く根づいたことも確かめられた。しかし、それ以上に民衆にどういう行動を促し、考える糸口を与えたかとなると、当時の社会における仏教の役割と交錯し、もどかしいほどに分かりにくかった。しかし日露戦争のあと、独立日本、殖産興業の路線で、円了が民衆の社会教育に貢献したことは確かであろう。円了の書は、円了が歩いた町、村の幹部の家の床の間にステータス・シンボルとして、あるいは家宝として飾られることが多かった。ただそれほどばかりかというと、そうではない。修養教会運動は多目的で全国的広がりを持ち、かなり大きな影響力を持っていたことから、円了が明治・大正の思想的指導者としての地位は高かったと考えられる。特にこれまでいわれてきたことだが、哲学の普及者、お化け博士としての啓蒙活動は高く評価されていることが認められる。

さらに、この稿には取りあげなかったが、円了思想の仏教改革との関わりについては、大きな足跡が残されて

いる。兵庫県竜野市の金森從憲師（哲学館第一期生）の子息法蔵師（一八九一年生れ、当時八十八歳）は、父が管長公選制を提唱し、本山から破門された話をされた。宮崎県都城市の佐々木正熙師（一八八七年生れ、当時九十五歳）を訪ねたとき、佐々木師が西本願寺宗務総長として宗門の大改革を断行された話があった。佐々木師は哲学館大学が東洋大学と改称し、大学部に昇格した折の第一回卒業生である。円了先生は竜野や都城をしばしば訪れた。ここに円了思想の実践的発展があったとみられる。これらのテーマは高木宏夫教授から報告されるであろう。私は、同行取材者として多くを学んだ。

（一九八三・一一記）